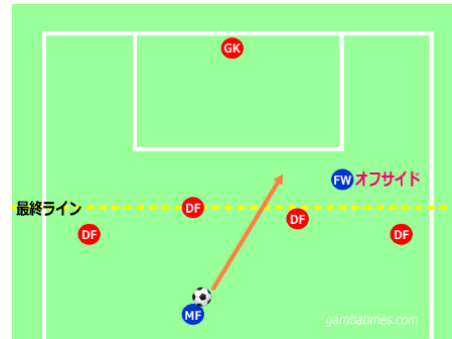
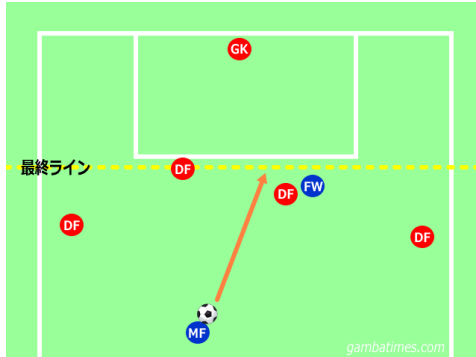


【オフサイドとは】

**第11条** 頭、胴体、または足の一部でも、相手競技者のハーフ内にある（ハーフウェーラインを除く）。競技者の頭、胴体、または足の一部でも、ボールおよび後方から2人目の相手競技者より相手競技者のゴールラインに近い場合



◎オフサイドにならない場面

○GK (ゴールキーパー) が飛び出している場合

残り時間が短くなり、試合に負けていると背の高い GK (ゴールキーパー) が前線に出ていく場合があります (CK の場合など)。このような時には、最終ラインは一番後ろの DF ではなく、もう 1 人前の DF が最終ラインになります。

○ハーフウェーラインを超えていない場合

一番最初のサッカー規定の中にハーフウェーラインを超えていない場合は例外とあります。この意味は、相手陣地より内側 (自分の陣地) でオフサイドポジションにいてパスを受けてもファールになりません。全員が引いて守っていて、そこからカウンターになる時に、ハーフウェーライン内側にいた FW がオフサイドラインであっても、それはオフサイドにはならないというルールがあります。

○コーナーキック (CK) はオフサイドにはならない

CK (コーナーキック) は一番下の位置にいるので、それより前に選手がいるわけではないので、オフサイドにはなりません。

○スローインはオフサイドにならない

スローインの場合は、相手選手の前に出てもオフサイドにはなりません。

○センタリングはオフサイドにならない

ボールを持った選手がサイドからセンタリングをする時、ほとんどの場合は自分がいる位置より中に上げることが多いので、その場合はオフサイドにはなりません。例外としては、そのセンタリングが内側ではなく、外側 (前目) に出された場面ではギリギリのラインでのオフサイドは存在します。あくまで今いる位置から前であるかないかの判断です。

○ボールに絡んでいない選手がオフサイドラインにいてもオフサイドにはならない

このルールはよく変更されているのですが、全くボールに絡んでいない選手が、最終ラインを越えていてもオフサイドにはなりません。例えば右側で試合が展開している中で、左端で足が痛くて止まってみる選手がいたりした場合などがそれにあたります。昔はそれでもオフサイドとして判定されていましたが、今はオフサイドにはなりません。このような場面は色々なケースがあるので、判断は審判に委ねられます。※このルールは微妙に変わるので最新ルールに基づいて判断されます。

【オフサイドのルール改正】

来夏(2022年)、サッカーのオフサイドは大きなルール改正が行なわれる予定だ。今まではオフサイドラインになる相手の選手(多くは最終 DF)よりも、手や腕を除く身体の一部が前に出ている場合、その選手はオフサイドポジションであると判定されてきました。しかし、ルール改正後は、手や腕を除く身体の一部が、相手の選手と同じラインに残っていれば、その選手はオフサイドポジションではない、と変更になります。「たかが身体の幅くらい」の差と思うかもしれないが、この差によって多くのゴール、ノーゴールの判定が逆の結果を導くことを考えれば、極めて重大なルール改正だ。FIFAはこのルール改正により得点が50パーセント増え、攻撃的なサッカーになると説明しています。



|  |  |  |   |   |
|--|--|--|---|---|
|  |  |  |   |   |
| <p>(1)が(2)にパスを出した場合<br/>守備側チームでもっともエンドラインに近いのが(A)のGKで、2番目に近いのは(B)となり、この(B)がいるライン(オフサイドライン)からエンドラインの間の部分がオフサイドポジションとなります。よって、(2)にパスを出すとはオフサイドとなります。</p> | <p>(1)が無人のオフサイドポジションにパスを出し、(2)が走りこんで受けた場合<br/>(2)がボールを受けた場所はオフサイドポジションですが、(1)がボールを蹴った時点ではオフサイドポジションにいないので、この場合はオフサイドになりません。また、(3)はオフサイドポジションにいますが、プレーに関与していないのでこれもオフサイドになりません。</p> | <p>オフサイドポジションにいた(2)が戻ってきて(1)のパスを受けた場合<br/>(2)がボールを受けた場所はオフサイドポジションではないですが、(1)がボールを蹴った時点でオフサイドポジションにいたので、この場合はオフサイドになります。</p> | <p>(1)がうったシュートをGKがはじき、こぼれたボールを(2)がシュートして決めた場合<br/>(1)がシュートをうった時点で(2)はオフサイドポジションにいますが、シュートの際にはプレーには関与していないのでオフサイドになりません。しかし、ボールをシュートするとプレーに関与したことになるのでオフサイドとなります。また、GKではなく、ゴールポストやクロスバーに当たって跳ね返ったボールに関与しても同様にオフサイドとなります。</p> | <p>(B)が(1)のディフェンスにいかうとするのを(2)が邪魔をし、(1)がシュートを決めた場合<br/>(2)はボールには関与していませんが、ボールに関与しようとする(B)の動きを妨げ、自チームに有利になるような行動を取っているためオフサイドとなります。</p> |

◎どうしてオフサイドのルールがあるのでしょうか?オフサイドがある場合と、ない場合ではゲームはどのように変わるの

---



---



---



---



---



---



---

## 【語の由来】

サイド side とは〈チーム〉を意味することから、このオフサイドという用語は、プレイヤーが〈チームを離れて(ボールより前方の位置に)いる〉ことを意味している。古くは〈オフ ヒズサイド off his side〉ともいい〈君は自分のチームを離れている〉とプレイヤーに警告するために用いられたが、今日では反則を意味する用語となっている。

## 【オフサイドルールの誕生】

オフサイドという用語がスポーツのルールではじめて用いられたのは、1845年、イギリスのラグビー校で最初にフットボールのルールを成文化したときである。このルールではその第2条で、〈プレイヤーは彼の後方で味方のプレイヤーがボールに触れたとき、相手チームのプレイヤーがそのボールに触れるまでオフサイドである〉と述べ、さらに第10、11、12、13、14の各条で、どのようなプレイがオフサイドであるのかを詳しく示している。しかしこれらのルールは翌1846年のルール改正で〈オフサイドのプレイヤーは競技に関係ないものとみなし、いかなる場合でも(競技場の中において外において)ボールに触れてはならない。またどんな方法でもプレイを妨げたり、ボールを持ったりすることも、もちろんしてはならない〉(第6条)と改められた。

ラグビー校におけるフットボールルールの整備に刺激されて、イートン校もまた1847年に同校のフットボールルールを成文化するが、その第19条は〈プレイヤーは、彼の前方に相手チームのプレイヤーが3人、もしくは3人以下であって、しかもボールが彼の後方にあるときスニーキングであり、彼はボールを蹴ることができない〉と述べている。

さらに翌1848年にはケンブリッジ大学でもフットボールルールを成文化し、その第10条で〈プレイヤーは、ボールと相手ゴールとのあいだをうろつくことは許されない〉と規定している。このようなくスニーキング sneaking(こそこそする)〈うろつく to loiter〉というような用語で表現されていることから明らかなように、当時の若者たちはボールの前方でプレイすることをのぞましくない行為であると考えたのであり、それはまた、イギリスの多くの地方で告解火曜日 shrove tuesday などでの中心的な行事として行われていた〈マスフットボール〉が、次第に近代的なスポーツへとその性格を変えつつあった過程におけるフットボールの、ひとつの大きな特徴であった。

## 【オフサイドルールの背景】

18世紀の中期に、イギリスのウェストミンスター校で行われていたフットボールでは、〈アウトサイディングやオフサイドはよくない行為ではあるが、しかしルール違反ではないとされていた〉という(I.R. モアによる)。このことは、当時行われていたフットボールで〈チームを離れる off side〉ことがしばしば行われていたことを示しており、このころのフットボールが、なおまだ地方的な〈祭り〉のなかで、村や町の全域を競技場にして行われていた〈マスフットボール〉の伝統から完全に脱皮していなかったことを示している。このような地方的な〈祭り〉のなかで行われていた〈マスフットボール〉では、競技場の広さや競技への参加者数などが明確に決められておらず、したがって参加者は自由に〈チームを抜け出し〉たり、〈チームを離れ〉たりすることができ、それが〈祭り〉を楽しむという目的の範囲内の行為であれば、だれにも許され、認められていた。

しかし、やがてこのようなフットボールが、空地や広場、富裕階級の子弟が通学する学校(パブリックスクール)の校庭などで、季節の行事としてではなく日常的な余暇活動として、また〈祭り〉としてではなく、〈勝敗を争う〉ことを目的として行われるようになって、自由に〈チームを抜け出し〉たり〈チームを離れ〉たりする行為が、目的に合わない行為と考えられるようになってきた。オフサイドルールが生まれてくる背景には、このようにフットボールが行事から競技へと、その性格を大きく変えてくる歴史があった。スポーツのルールは、一方でこのように自然で自由な人間の行為を制限しつつ、他方でより合理的、直接的に目的を達成しようとする動機を含んでおり、オフサイドルールにも、プレイヤーが自由に〈チームを離れ〉ていく行為を制限することによって、かえって目的がよりよく達成できる、という考えが含まれているのである。

### 【オフサイドはなぜ反則か】

オフサイドルールについて考察するとき、前方の相手ゴールに向かってボールを進めていく競技であるにもかかわらず、なぜボールよりも前方でプレイすることを禁じたり、制限したりしたのであろうか、という疑問が付きまとう。バスケットボールやアメリカンフットボールが、このような制限を排除することによって新しいスポーツへと転換したことを考えあわせるとき、この疑問はより鮮明になる。イギリスの若者たちは、なぜ〈オフサイドの位置〉でプレイすることを、のぞましくない行為と考えたのであろうか。

その主要な理由は、やはりフットボールが村や町の全域を競技場として行われていた形式から、空き地や校庭で行われる競技へと変化したことに求められる。〈祭り〉のなかでのフットボールでは、得点を競うことよりも雰囲気大切に、それが共同体の結束や伝統の遵守を示していることに満足することの方が重要であったから、参加者が〈チームから離れ〉ることは自由であった。しかし、勝利の追求を目的として行われるフットボールでは、個人の気ままな行為は許されるべきではなく、プレイは組織的に展開されなければならなかった。1857年に刊行された《トム・ブラウンの学校生活》のなかには、初歩的とはいえ、重部隊 heavy brigade、軽部隊 light brigade、ゴールキーパーたち goal keepers などの役割分担が行われていたことがみられ、それぞれのグループにはキャプテンさえ配置されていて、組織的なチームプレイを展開したいという意図があったことが読みとれる。〈スニーキング〉とか〈ロイター〉とかの用語には、このような組織プレイに加わらず、またそれからく抜け出して、自由にプレイすることへの非難がこめられており、そのかぎりでは、ボールよりも前方という位置や方向よりも、むしろ〈チームを離れ〉て気ままにプレイすることのほうこそ非難されるべき行為だと考えられていたといえる。ラグビー校のルールに、オフサイドのプレイヤーは〈競技場の中にいようと外にいようとボールに触れてはならない〉とあることは、〈チームを離れ〉て競技場外でボールを得ようとするプレイヤーもいたことを暗示しているが、このような意味をも含む〈オフサイド〉という用語は、プレイヤーが競技場の外でプレイする(アウトサイディング)ことの防止という意味をもち、この時代のイギリスの若者たちの組織的プレイへの要望を内包しているといえるのである。



◎オフサイドの歴史についてまとめましょう。

※疑問に思ったことや分からない用語があれば書いておきましょう。